

障害者スポーツ推進プロジェクト

～地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業～

事業報告概要版

弘前大学教育学部附属特別支援学校

2020年度の課題

- ・ 新型コロナ感染拡大防止のため、集まっての活動が難しい ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ・ コロナ禍への対応と、GIGAスクール構想を見据え、すぐにはできなくても長期的にICT機器に頼っていくことも必要だろう。 ⇒ オンラインスポーツ教室を試行。
- ・ 本校は重度の子が多く、周知は参加できそうな子に限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。⇒ 会場に集まることが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会の方が参加の可能性が高くなると予想する。
- ・ 幼児期からの身体運動の機会を提供することをねらいとする「きっずパークとみ～の」を弘前市と共催し、馴染みのある公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたいと考えている。
⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

地域の小中学校等と
地域の特別支援学校を
オンラインで繋げた
スポーツ教室の立案

- 【予想される効果】
- ・コロナ禍でも開催可能
 - ・障害の程度に関係なく、参加可能
 - ・地域の小中学校との繋がり

バーチャルリアリティーゴーグル
の活用



【予想される効果】

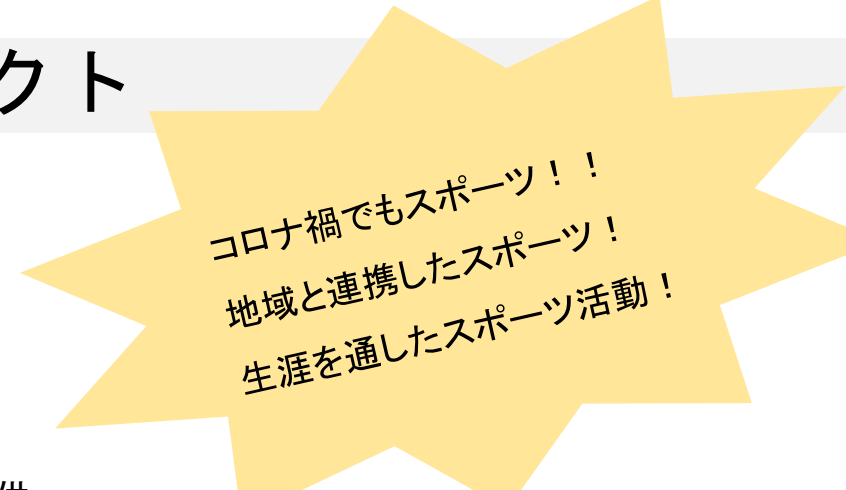
- ・コロナ禍でもスポーツ体験が可能
- ・運動施設で運動しているかのような臨場感を体感することにより、スポーツの楽しさを体験
- ・アウトリーチ型実施により、体験者の拡大

「きっずパークとみ〜の」の
地域開催



【予想される効果】

- ・幼児期からの身体運動の場の提供
- ・幼児期、児童期のインクルーシブ活動



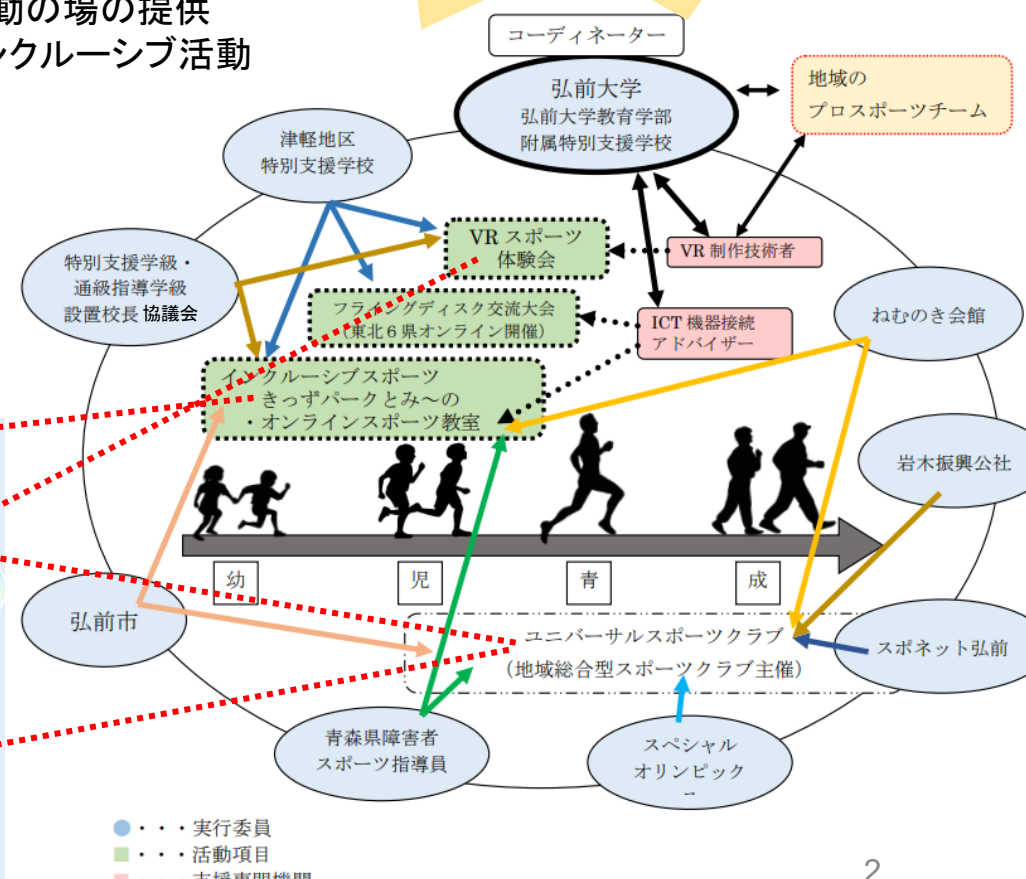
東北6県フライングディスク 交流会～弘大杯～の開催

東北6県を
オンラインで繋いだ
フライングディスク交流会の立案

【予想される効果】

- ・コロナ禍でも開催可能
- ・県境を越えた大会の開催
- ・移動が少ないため、普段取り組んでいる環境を大きく変えずに参加できる。

『弘前大学モデル』



- ... 実行委員
- ... 活動項目
- ... 支援専門機関

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

『オンラインスポーツ教室』～フライングディスク～

- ①フライングディスクの投げ方講習
- ②交流ゲーム

【本校小学部&附属小学校】10月13日(水)

人数 本 校：1～6年生 16人
附属小学校：3年2組 31人

- ・フライングディスクはやったことがあるけど正しい持ち方は知らなかった。
- ・すごく仲良くなれた気がしました。
- ・画面の向こうで応援しました。
- ・こんな機会はなかなかなくてよかった。支援学校の方は上手でびっくりした。

【本校中学部&附属中学校】12月10日(金)

人数 本 校：1～3年生 18人
附属中学校：1年生 32人

- ・とても楽しかったです。難しいけれど、協力してディスクをゴールに入れることができました。
- ・スポーツはしょうがいに関係なく一緒に楽しめるものだと思います。
- ・フライングディスクももちろん楽しかったけれど、ディスクを投げるときにお互いに応援しあっていたところが印象に残って楽しかったです。
- ・初めて出会った附属特別支援学校の人と、少しだけ仲良くなった気がした。運動は人と人とのコミュニケーションをはぐくむ一つの手段だと改めて感じた。

【本校高等部&県立弘前実業高校スポーツ科学科】

9月14日(火)

人数 本 校：1～3年生 19人
弘 実 高校：2年生 40人

- ・特別支援学校の生徒さんたちとリモートで会話やスポーツをするのは、絶対に難しいと思っていたので少し不安はありましたが、やってみたら意外と特別支援学校のみなさんが盛り上げてくれたので面白く、フライングディスクも楽しくできました。次回は直接会って楽しめたらと思います。
- ・リモートでの交流だったので、伝わりにくいことや表情が分かりづらいとか少し不便なこともあったので、次は実際に交流して、一緒に楽しさを共有したいと思いました。
- ・パラリンピックが終わったタイミングで体験できてとても良かったです。
- ・障害のあるなし関係なく楽しめるスポーツに触れることができ良かったし、もっといろいろなスポーツについて知りたいと思いました。

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催 『わいわいスポーツクラブ～VRスポーツ体験～』

【製作動画】 「サッカー」「高校生の部活動」「スキー」「一緒に遊ぼう」 *地域のスポーツ団体等に出演を依頼し制作した。

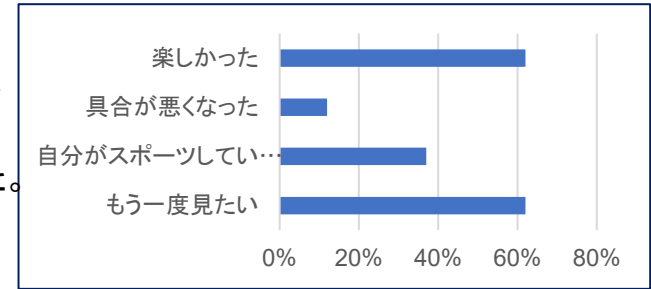
VR制作会社に動画制作を依頼 ➡

- ・完成度の高い動画
- ・動画の編集, ゴーグルの操作等について職員の研修の場となった。

実施期日・人数 12月25日: 5人
 場所 附属特別支援学校体育館
 内容 ①VR動画視聴
 ②サッカー体験 (ブランデュエ弘前)

【生徒の声】

- ・終わった後, 架空か現実かわからなくなるけど純粋に楽しかった。
- ・サッカーのシュートを見て, 僕もやってみたらシュートが入った。
- ・画面の選手と一緒にサッカーできた。
- ・スポーツのルールがわかってきた。
- ・いろいろな目線で見れて楽しかった。



《アウトリーチ開催》



実施期日・人数 1月31日: 12人
 場所 弘前第二養護学校
 内容 ①VR動画視聴

【生徒の様子】 ~肢体不自由重複障害児対象~

- 右手が少しだけあがった。両手をパタパタはばたかせるような動きが見られた。
- 映像が空に向かうと「あー」と声を出していた。
- トランポリンの映像時に足が動いていた。
- 歩く場面, トランポリンで足をパタパタと動かしていた
- ゴーグルをつけて右左と首を動かして周回を見ていた。
- VRの中の動きに合わせて, 上を見上げたり手を前に出したりするなど, 実際に自分で動いているような感覚を味わっていたようだった。
- VRゴーグルを装着しながら, 周りをグルグルし映像を360度見回していた。
- 「おーっ!!」「すごー!!」などの感嘆の声が上がっていた。
- △初めて見る物 (VRゴーグル) で不安そうにしていました。
- △装着が難しかった。

【VRゴーグルの可能性】 教員アンケートより

疑似体験への期待

普段、走れない児童が、風を切って走るような感覚や非現実的を空を飛ぶの疑似体験ができて、楽しく学ぶことができるとい、想像力も豊かになると感じた	送風機等で風を送り、VRゴーグルで空を飛ぶ映像などを見せることで、鳥になったような臨場感で、物語(主人公の気もちや場面)の理解をしたり、ジェットコースターに乗る映像を疑似体験をしたりすることで、解放感、爽快感を味わえる		
室内にいながら、外で活動しているかのような体験	体験できないことを見て感じることができるようになる	臨場感あふれ、たのしく活動できる	体験という形で、色々な体験ができる
スポーツに関していえば、自分の動きと、映像がリンクするようだとより楽しむことができる	美術館、水族館、遊園地など、いろいろな施設に行く体験ができる	乗馬、スキューバダイビング、車の運転、自転車、バイク、動物に近づく	体調不良等で参加できなかった校外学習等の疑似体験
雨天時でもその場にいったような体験が可能	雨天時の対応として事前活動予定の動画を視聴		

肢体不自由のある子どもたちへの利点

日常的な移動や運動が難しい子どもの運動経験の補完	移動が難しいお子さんにとって非常に有効な手段	経験や体験が少ない生徒達なのでいい
リアルタイムで何がみえているのか把握できないと、「何を見聞きして、この動き、反応か」が判断できない	生徒目線本当に見ているかがわからないので難しいように思う	「ゴーグル」は難しい

課題

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

『きっずパークとみへの』

実施期日・人数

① 10月16日： 7人

② 11月27日： 16人

③ 12月23日： 3人

④⑤ 1月14日/2月5日 中止

場所

① 附属特別支援学校体育館

②③ ヒロロ

④⑤ B&G海洋センター 中止

アンケート結果

【感想・自由記述より】

- ・楽しかった・また参加したい。
- ・冬は外遊びができないためこのようなプレイパークがあると親子共助かり楽しい。
- ・コロナ禍でも安心して遊ばせられる場所で、楽しめた。
- ・毎回楽しみにしています。体をたくさん動かして遊べるので子ども達は大喜びです。
- ・幅広い年齢の子と一緒に遊べる空間が貴重なので今後も続けてほしい。
- ・危険がないか心配だったが、見守ってくれる方がいて安心して遊ぶことができた。



写真：ヒロロでの活動の様子

東北6県 フライングディスク交流大会～弘大杯～の開催

『第5回フライングディスク交流大会～サテライト大会～』

実施期日

12月25日（土）

場所

附属特別支援学校体育館（本会場）

福島県，宮城県（サテライト会場）

人数

参加者：青森県15名 福島県11名 宮城県16名

【参加者・大会役員の声】

- ・初めてのオンライン大会。どうなるかと思いましたが、新しい形で、コロナ禍でもフライングディスクができたことをうれしく思います。参加者も大会が終わっても余韻に浸り、みんなが「またやりたい」と声をかけて会場を後にしました。（宮城県）
- ・スタッフも保護者も選手も、この交流大会を楽しみにしていました。（「いつやるの？」と声をかけられました）今回は、全国大会のメンバーがたくさん出ていました。全国大会が中止となった中で、県境を越えての大会に参加できたこと嬉しく思います。また、来年もやりましょう！！（福島県）
- ・専門家の活用で、安心して大会運営できました。（青森県）

ICT接続機器アドバイザーの協力 → 働き方改革(専門家の活用による業務の分担)

トラブル時の迅速な対応

本校教員の研修の場(今後の教育活動への繋がり)

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

【追跡調査結果】

6年間の活動～スポーツ庁委託事業を受けて～ 【2016年度～2021年度】

趣旨

みんなで
スポーツ

情報
発信

地域人材
活用

インクルー
シブ

地域行政
との共催

ICT
活用

生涯を通して
スポーツ！

『弘前大学モデル』構築

活動内容

フライングディスク校内大会

フライングディスク交流大会
(東北地区:ICTサテライト大会)
(県内全域)

フライングディスク交流大会

わいわいスポーツクラブ
(障害児対象:本校会場)

わいわいスポーツクラブ
(インクルーシブ)

わいわいスポーツクラブ
(インクルーシブ:地域体育施設会場)

わいわいスポーツクラブ
～VRスポーツ体験～
(コロナ禍での実施)

きっずパークとみ～の
(幼児対象:本校会場)

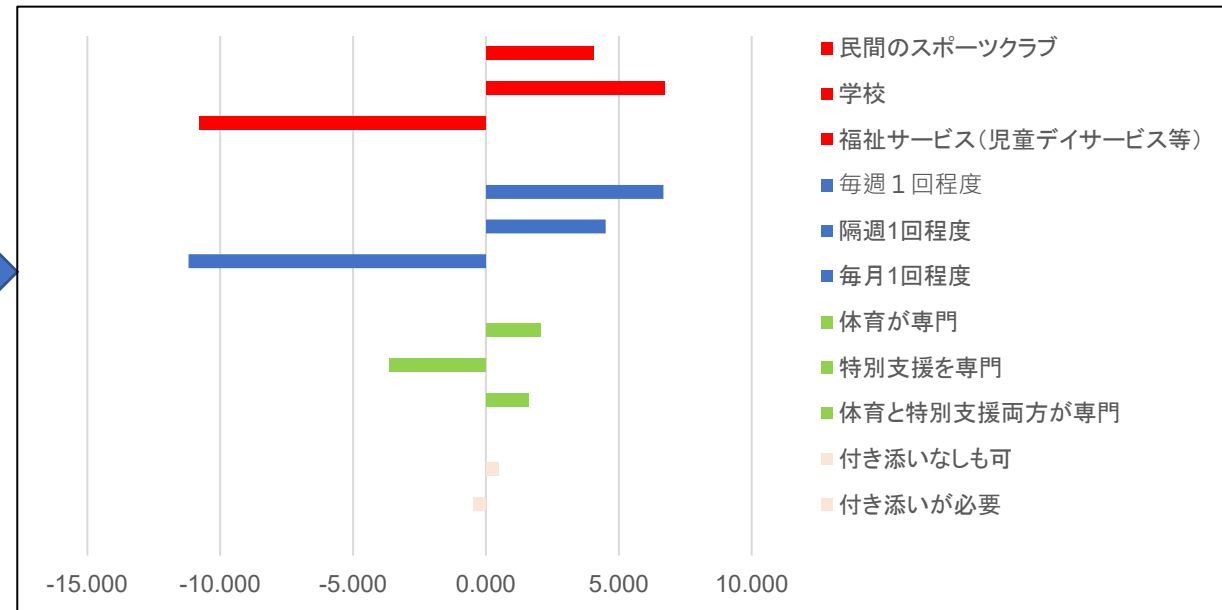
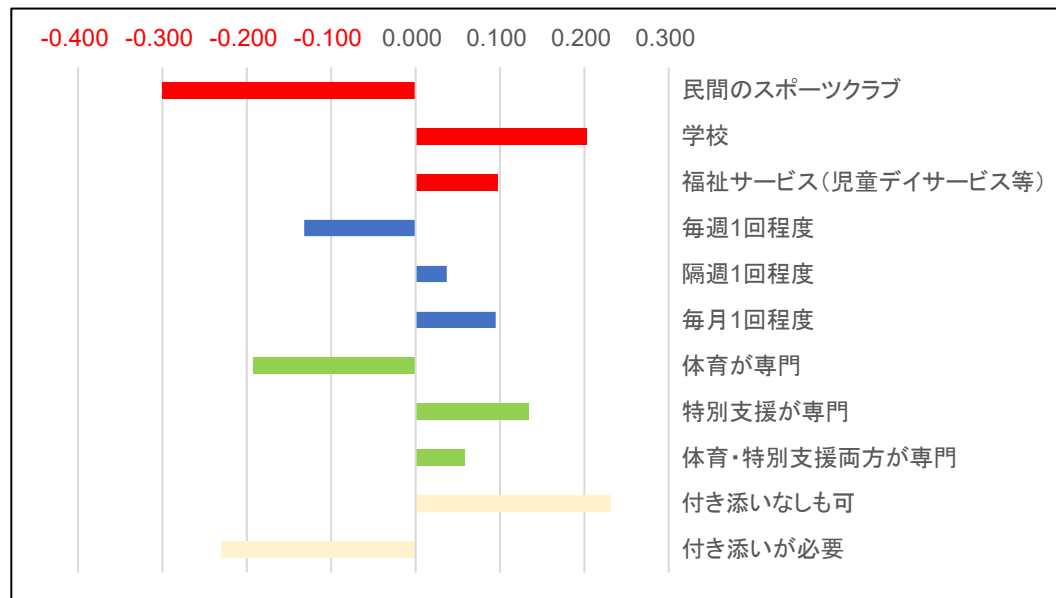
きっずパークとみ～の
(幼児対象:地域施設会場)

オンラインスポーツ教室

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

【追跡調査結果】

6年間のスポーツ庁委託事業の変容 【2016年度～2021年度】



- ・全体の結果としては「運営主体」を重視する傾向が高いという結果となったが、児童生徒の在籍（特別支援学校か特別支援学級か）で、その傾向に明確な相違点があった。また、前回（「運営主体>「保護者の付き添い」>「指導者」>「会の開催頻度」）と比較して、「運営主体」重視が下がり、「開催頻度」が重視されている。
- ・児童生徒が特別支援学校在籍の場合、「運営主体」、なかでも【学校】への期待が高い。また「開催頻度」も【隔週】、指導者は【体育が専門】を重視する傾向が確認された。特別支援学校在籍児にとって、地域のスポーツ活動等への参加がまだしにくいため、一般の体育指導者が受け入れてくれる状況を求めている、そのコーディネーター等を学校に期待しているのではないかと推察される。
- ・一方、児童生徒が特別支援学級在籍の場合、「運営主体」は児童デイサービス等【福祉サービス】への期待が高く、また「頻度」も【毎週】、指導者は【特別支援を専門】を重視していた傾向が確認された。前回調査以降身体活動の重視を強く打ち出す福祉サービスも散見されるようになった背景もあって、特別支援学級在籍児にとっては、比較的地域でスポーツ等参加できる機会があるからこそ、子どもがスポーツ等指導者の多くに特別支援の見識を求めているのではないかと推察される。
- ・「保護者の付き添い」は両群とも【付き添いなしも可】を重視していたが、特別支援学級の方が強く打ち出されていた。

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト 【成果と課題】

「実行委員会」での意見 【キーワード】定期的・障害者スポーツ指導員・連携・インクルーシブ 【インクルーシブスポーツ活動の可能性】

【地域でのスポーツ活動に期待すること】

- ・身近に感じて気軽に行けるようなスポーツ活動の場
- ・定期的にスポーツができる場
- ・共生社会の更なる実現のために、障害者と健常者がスポーツを通して交流できる場
- ・障害者スポーツ指導員を活用したスポーツ活動

【地域で連携したスポーツプログラムの提案】

- ・他団体が主催しているスポーツ教室とタイアップしての「移動スポーツ教室」(移動難の課題解決のため)
- ・地域のスポーツ団体と連携したスポーツ教室
- ・定期的な活動ができる体制作り

- ・一緒に活動することで、健常児にとっては障害者がスポーツをすることへの理解が深まるかもしれません。ただ、障害者にとっては、不快に感じることもあると聞きます。
- ・参加する者全員が楽しめるような環境とするために、運営要素やハンデの活用が必要参加対象者だけでなく、そのご家族や関係者にもインクルーシブスポーツの認識と理解を促すことも重要
- ・公共施設に常設のポッチャコート設置など、そこにいったら、その種目が楽しめるという場所づくり

インクルーシブスポーツ活動を定期的に実施
障害者スポーツ指導員の活用

地域スポーツ団体との連携したスポーツ
教室

- ・行政との連携
- ・『みんなでインクルーシブ活動』の開催

【成果】

- ・新型コロナ感染拡大防止のため、集まった活動が難しい ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ・コロナ禍への対応と、GIGAスクール構想を見据え、すぐにはできなくても長期的にICT機器に頼っていくことも必要だろう。 ⇒ オンラインスポーツ教室を試行。
- ・本校（弘前第二養護学校）は重度の子が多く、周知は参加できそうな子に限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。
⇒ 会場に集まることが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会の方が参加の可能性が高くなると予想する。
- ・「きつずパークとみ～の」を弘前市と共催し、公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたい。 ⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

- ・コロナ禍で他校との接触が制限される中、スポーツを通じた交流が実施できた。
- ・専門家の活用が職員の研修の場となり、新しい知識の習得に繋がった。
- ・新たな活動形態の可能性が見えた。

- ・アウトリーチで実施したことで、たくさんの生徒が体験でき、経験の拡大に繋がった。
- ・「またやりたい」「○○のスポーツもみてみたい」と興味や関心が広がった。

- ・弘前市の施設の借用手続きがスムーズになった。地域課題を共有して取り組むことができた。

【課題】 VRスポーツの可能性(環境整備, スポーツ活動への繁華), オンラインスポーツイベントの可能性と普及
継続したスポーツ活動に向け, 役割分担を明確にした組織作り